LIBRARIES
UNIVERSITY OF WISCONSIN–MADISON

蝦夷風俗彙纂 = Ezo fūzoku isan. [Series 2, vol. 8] 1882

[s.l.]: [s.n.], 1882

https://digital.library.wisc.edu/

http://rightsstatements.org/vocab/NoC-US/1.0/

The libraries provide public access to a wide range of material, including online exhibits, digitized collections, archival finding aids, our catalog, online articles, and a growing range of materials in many media.

When possible, we provide rights information in catalog records, finding aids, and other metadata that accompanies collections or items. However, it is always the user's obligation to evaluate copyright and rights issues in light of their own use.

728 State Street | Madison, Wisconsin 53706 | library.wisc.edu

蝦夷風俗彙纂後編

九

CHESTER S. CHARD

蝦夷風俗彙纂後編巻八目次

○雜録下

蝦夷の碑類ゟ和文を用ふる事
有珠嶽噴火の事
蝦夷戸口の事
夕張土人由來の事
イサリムイサク土人由來の事
西別川論始末の事
鴈鴨の事
千嶋の事

○後巻八

唐太島の事
攝津漁夫蝦夷へ漂流の事
義經蝦夷并滿州へ渡海の事
義經武威の事
義經東察加地方ゟ到る事
義經事蹟の事
○雜録追加
蝦夷人胡沙吹事
擇捉夷人開化の事
蝦夷人書簡の事

化石の生長せる事
飯鳥の事
銭銭高直の事
群鹿の事
鹿川を渡る事
黒鹿の事
海扇海上往來の事
厚岸蠣島の事
山靈の和人を嫌ふと云事
まじなひの事

鏃石の降といふ事
奇石の事
シユトホ故由ある事
猿留新道の記
蝦夷山川の事
蝦夷人の教化をもちる事

蝦夷風俗彙纂後編巻八目次終

蝦夷風俗彙纂後編巻八

○雜録

○蝦夷の碑類ハ和文を用る事

蝦夷地へ立るせべての碑類ハ漢文を用ひざるハ林大學頭乘衡曰今度彼地の舉ハ新ハ本邦の通り處置せしめ給ふ所なれバ和文ハてこそのらまほしけれと云て故ハみな和文を以て記ル休明光記

様似字オソフケウシハ建けん碑文を守重ゞ平仮名

もて記せるハ感ぜべし。總て往來等の事ハ。かくあらまほしきなり。然るに其事を土人に話したまバ。土人のいふ。守重(カニカサ)ニシハ。爰元和人字にてむかし立置しゞ故に。松前の役人取捨たるなり。是を土人字に書て建置ばあバ。松前領に成しとて取捨べきやいと。よつて其土人字とも何ぞと聞に。片仮名ハ事なるよし答へ。其故ゝ今に土人ハ名前。まゝ地名等。皆片仮名もて云るせバなり。東蝦夷日誌

○有珠嶽噴火の事

有珠嶽の燒出せしハ。寛文八年ハ七月十四日にして。

五年

松前近邊までも。震動せる事度々ありて。十五日ハ大ひゝふるひ。雲中ハ神軍といひて色々ゝ音きこえ。煙中ハ光を物ゐりて輝きそしる。和人夷人共ハ是城見るもゝ多し。又南方ハゐのこをて大ハ震ひしらば。人々大ひハ恐怖をおしたりしとぞ。北海隨筆

○蝦夷戸口ゝ事

文政壬午野作戸口表

山越内　戸百。七　人口五百。四人　男二百五十一　女二百五十三

蛇田　戸百七十六人

人口八百人　男四百十一　女三百八十九

有珠　戸百〇三　人口四百十七人　男百七十八　女二百三十九

繪鞆　戸三十六　人口百四十四人　男七十八　女六十六

幌別　戸五十八　人口二百三十一人　男百十　女百二十一

白老　戸七十二　人口三百三十二人　男百五十九　女百七十三

勇拂　戸三百十二

人口千三百十二人　男六百五十二　女六百六十

沙流

戸二百三十二

人口千二百十五人　男六百二十七　女五百八十八

新冠

戸八十一

人口三百五十八人　男百八十四　女百七十四

静内

戸百〇四

人口五百二十三人　男二百四十一　女二百八十二

三石

戸五十六

人口二百二十二人　男百〇二　女百二十

浦河

戸七十五

人口三百二十七人　男百四十六　女百八十一
戸二十三

樣似

人口百三十二人　男六十一　女七十一
戸三十九

幌泉

人口百七十三人　男七十四　女九十九
戸百七十一

十勝

人口千〇九十九人　男五百二十二　女五百七十七
戸二百七十七

釧路

人口千三百四十九人　男六百五十三　女六百九十六
戸百六十四

厚岸

人口八百〇四人　男三百七十九　女四百二十五

根室

戸二百五十四

人口八百九十一人　男四百四十二　女四百四十九

國後

戸百〇六

人口三百四十七人　男百五十九　女百八十八

擇捉

戸八十一

人口八百四十九人　男四百二十　女四百二十九

瀬棚

戸十九

人口八十六人　男四十五　女四十一

太櫓

戸十七

人口六十八人　男三十二　女三十六
久遠
戸五
人口二十五人　男十一　女十四
島牧
戸三十三
人口百二十八人　男六十七　女六十一
壽都
戸十五
人口七十六人　男四十　女三十六
歌棄
戸四十六
人口二百〇九人　男百〇六　女百〇三
磯谷
戸二十四

人口八十三人　男五十二　女三十一

岩内

戸七十一

人口二百五十一人　男百二十一　女百三十

古宇

戸二十九

人口百二十八人　男六十六　女六十二

積丹

戸十五

人口八十二人　男四十　女四十二

美國

戸十四

人口五十四人　男二十八　女二十六

古平

戸七十三

人口三百七十四人　男二百　女百七十四

余市

戸八十九

人口五百六十四人　男二百八十三　女二百八十一

忍路

戸七十一

人口二百九十二人　男百四十九　女百四十三

高島

戸四十一

人口百八十九人　男百〇三　女八十六

小樽内

戸四十三

人口百五十人　男六十九　女八十一

石狩

戸三百三十二

人口千百五十八人　男五百九十二　女五百六十六

上川

戸七十五

人口五百二十七人　男二百六十三　女二百六十四

厚田

戸十九

人口七十二人　男三十五　女三十七

濱益

戸八十四

人口二百九十九人　男百五十三　女百四十六

増毛

戸八十五

人口四百三十七人　男二百二十七　女二百十

留萌

戸九十九

人口四百七十二人　男二百四十四　女二百二十八

笘前　戸四十八　人口二百十一人　男百〇八　女百〇三

天鹽　戸七十八　人口四百十八人　男二百十五　女二百〇三

利尻　戸二十八　人口百十六人　男五十七　女五十九

宗谷　戸四十九　人口七百十九人　男三百五十三　女三百六十六

紋別　戸二百八十二

人口千百三十六人　男五百三十九　女五百九十七

斜里　戸三百十六　人口千三百二十六人　男六百十二　女七百十四

唐太　戸三百五十七　人口二千五百七十一人　男千二百。八　女千三百六十三

總計戸四千九百八十四口二万四千二百五十　男一万二千。六十七　女一万二千百八十三

蝦夷新書

○夕張土人由來の事

夕張ハ往古より千歳領ゐて。千歳川筋イヘツフト迄の間。左右ゐ川野山とも。千歳土人共自由ゐ徘徊致し

候。其頃タ張ヨハ。住居の土人も無之。右タ張土人ハ初
ヨを尋ぬバ。元十勝土人ヨテ。ゐる時古郷カムイ呑ハ
節。言分の甚悪敷事有之。數多の土人共より憎を受。右
等の事ヨ付。女房土人變死せしめても。此所ヨ住居難
致。依て同所を立去り。沙流領アベツと云村へ相越。頭
役の土人コクワヌと云者の方ヨ。世話ヨ相成居。年月
重り候故。右コクワヌより十勝土人へ申聞候ゑ。古郷
へ再び歸り度存念ヨ有之哉の段相尋候處。同土人の
答ヨゑ。如何様ゐる事有之候とも。古郷十勝へ歸る存
念ゑ毛頭無之。何卒此所ヨ永年住居いさし度趣達て

相頼依之コクワヌより再び申聞候ゐて左様の心得ゐ候へば以來其方義當所土人ゐいさし遣し可申と契約いさし其後數年相過コクワヌ風と心付事有之右十勝土人へ申聞ゐて扨其元も當所ゐ永住致し居候ても聊差支無之候へども其元ゐ内談いたしたく義有之沙流川上ゐ當て夕張と云高山有之其麓ゐ小川數々有之だ千歳領ゐて其川々へ鮭澤山ゐ登り候間御輕物ゐ相成候鷲獺其外毛物澤山殊ゐ土地も至て宜敷千歳川へて道近く候間右の處へ住居を求候てて如何ゐ候哉此段申聞候處十勝土人の答ゐて幸

望ム土地ヲ候間。何卒其所ヘ引移度と願出候ヲ付。夫より支度爲相整。右ゝ張川の右手ヲ家を取建候處。兼て承り候通。鮭澤山ゟ喰物ヲ相成。又色々ム草根も澤山ヲ有之。其外山獵ム便利大ヲ宜敷所ゟれバ。何も不自由無之。年月相凌ぎ居候得共。一人ヲてゟ永住難相成。夫より千歳川の下チカエと云村ハ地理近き故。同村より女房を貰ひ受候處。追々子供三四人も出生有之。右子供等段々成長ヲ隨ひ。兄弟のもム共不和ヲて中惡敷故。右兄弟ム内マヲイシユクハイと云處ヘ。勝手ヲ振分り住居いさし。尤其處ム千歳の土人共。夏

分ゟ。畑作致候場所ゟ。年々土人も込合候事故。段々睦敷相成。互ゟ嫁聟等ハ縁類ゟ相成。千歳川ランコウシと云處よりも。彼ハ地へ頭役土人引越永住致し。依之段々土人人別大勢ゟ村々も相殖候得ども。全石狩領の土人ゟ一人も無之。イヘツブトよりシユマラ邊ゟ。石狩土人の居住一軒も無之段。前々より土人ども云傳ゟ候。夫ゟ付申上候義も。往古よりタ張山權現様の御像。今ゟ至るまで。千歳川ゟ安置し有之義も。無相違事ゟ御坐候。

○イサリムイサク土人由來の事

ムイサク土人ハ根元ヨリ男土人ヲホロサンの生女土人ヲ昔ヨリ地名ヒホクシと云て當時ハ新冠生ヨリ夫婦ヨリ相成沙流ヨリ永住致し居候へども其後ハ沙流山々ヨリ鹿獵も無之畑作等も無之飯料之敷難澁ヨリ付夫婦ヨリて相談致し候ヨリ イサリムイサクと云處夏より秋迄鱒鮭雜魚等澤山ハよしヨリ候間其處へ參り永住いたし候ハヾ安心ヨリ相成可申と夫婦一決致し夫よりムイサクへ相越同所ヨリ住居いたし候處追々子供澤山出生成長いたし候後父母共病死致し候へども古郷沙流へ歸る事も不相成其所ヨリ永住いたし居

シリマウカと云者は代ゝ相成候節。オサツ村總小使サハシリと云者の姉。モンカランケを遣し。夫婦ゝ致し縁類ゝ相成。ムイサクゝ永住爲致候よし。全千歳土人ゝ相違無之候。其頃石狩土人も一人も住居無之候。其以前鮭鱒引網等も。相開け不申由。元來右引網ハ。此ヒホクシより相初ゑ。尤クゴ糸ゝて拵候。小屋小網引立候處。可成の漁事有之。其近邊ゝて。右は網拵方相習ひ候て網仕立。夫より石狩川口へも。當所の網一統放し。右大川ゝて引立候處。相應ゝ漁事有之。至て便利宜敷候故。まゝ勇拂領ゝても追々相仕立。石狩大川へ持

下ヨリ漁事致候得共。右網ヨリ元來勇拂より相初ヨリ候事ゆゑ。石狩土人共方ヨリて聊故障無之。勿論イベツブトより川上ハ千歳川筋の義ヨリ。舊來千歳領ヨリて。土人共をシコツ土人と相唱來候由。春先より夏分までヨリ。石狩大川通ヨリて小網引立。飯料漁事いたし來。秋ヨリ至り候へば。小川へ登る鮭を取り。西別へ參り小川々々ハ鮭漁致し。互ヨリ睦敷相凌居候處。其頃色々の品積入候商内小廻船。年々石狩へ川入いたし。土人共と交易致し。夫をイベツブトより上の千歳土人共浦山敷存候とて。右交易の品々。石狩土人へ願入候處。早速承知有

之。其頃も千歳土人共。矢羽獺皮其外の類澤山ゟ持合候故ゟ。石狩土人申ゟ。相應ゟ世話可致候間。右ゟ品々持下り可申と内談有之。夫より段々と相互ゟ睦敷相成り。石狩土人共イベツブトより上ゟ方ゟ。勝手ゟ假住居いたし居候由の處。夫成りゟ永住のものゟ有之候由ゟ候へ共。イベツブトより上も。昔より全千歳領ゟ相違無之。今ゟ至る迄川筋落口迄。イベツブトと唱來候ハ。正敷証據有之趣。土人共慥成聞傳ゟ候事。

右者後年爲心得。勇拂會所より寫取置候。

午三月　　石狩支配人源右衛門

土人由來記

○西別川論始末の事

乍恐以書付奉申上候

一西別川ハ。先年釧路の土人共。右川上より川口迄の處。價差出買請候趣お付。此度御上様御尋お預り奉畏候。依之釧路役土人共より私共へ。右川一條懸合おおよび有之候得共。西別川賣買の義も。是迄一向聞及無之。殊お西別川上は義も。元來釧路領地の内と相心得。土人住居おも可有之哉お奉存候。西別川

上シカルンナイと申所迄。雙方土人共入交ヲ。飯料鮭取罷越候よし是を承り。依之シカルンナイ。此地境ふも可有之と奉存候へども。治定相分り兼候ふ付。乍恐此段奉申上候。以上。

辰十二月　　根室役土人　陳　平

厚岸御役所様

乍恐熟談仕候以書付奉願上候

去十二月中。御呼出し相成候處。西別川并堺等の義。蒙御尋候ふ付。有体奉申上候。猶口書ふて可奉差上旨被仰渡則奉差上候處。根室役土人陳平。仁助へ。御

突合ふ相成示談仕候得共長立候者も無之相譯り不申歸村被仰付又々今般御呼出ふ相成根室庄屋四郎左衛門總年寄新右衛門其外前引合はものども罷出再度御突合雙方示談仕候樣被仰付候ふ付猶談判仕候處根室庄屋總年寄申聞候ふ〻賣買の義ハ存不申候得ども川口より川上迄ハ釧路領と相心得申候其譯と申義ハ四郎左衛門祖父イカシユンテと云もの右川筋通りの後見致呉候ふ付精一郎祖父ベケレニシより銀細工大刀鞘一本銀盃六つ相送り川口より川上迄の處後見相頼申候趣

根室庄屋へも申聞候處。川賣買の義ハ聢と不相心得候得ども。後見の義右品有之上ゟ。相違も無之義ゟ付。此廉を以て此度取極め。西別川口より川上迄。後日彼是不申趣。相渡呉候旨申聞候間。慥ゟ請取候積り示談相整申候。但地堺の義ゟ。往古ホンケネカより。シカルンナイと取極置候間。右様被仰付被成下候ハヽ。雙方不都合ハ廉も無之。難有仕合ゟ奉存候。雙方右熟談相濟候上ゟ。以來御上様へ御苦勞筋相掛申間敷候。依之立合連印仕爲後日。熟談書奉差上候。以上。

釧路年寄　小兵衛
同　開一
同總名主　真吉
同總年寄　武助
同庄屋　精一郎

安政四巳年三月廿四日

厚岸御役所

右の通通辨奉申上候處相違無御座候以上。

釧路通詞　三右衛門

一去十二月中御呼出しゑ相成西別川并境の義蒙御

作恐熟談仕候趣以書付奉願上候

尋を候處。陳平仁助兩人義た。聢と不相心得候ゟ付。
歸村の上古老のものゝ。承合可申旨被仰渡歸村仕
候處。今般御呼出ゟ相成。釧路庄屋精一郎總年寄武
助。其外前引合の者罷出。再御突合雙方熟談仕候樣。
被仰付候ゟ付。談判仕候處。釧路庄屋總年寄申聞候
ゟ。川口より川上迄買請候川ハ趣。被申聞候得共。
私共不分明ゟ候處。四郎左衛門祖父イカシユンテ
と云者ゝ。右川筋の義後見被相頼候ゟ付。釧路庄屋
祖父ベケレニシより。銀細工太刀鞘一本銀盃六ツ
相送ヲ。川口より川上迄後見被相頼候趣。右品の内

太刀鞘ゟ。四郎左衛門弟ハ家ヲ有之。孟ゝ親類陳平方ヲ有之上ゟ。全釧路より出候品ヲて。同斷庄屋申聞候次第相違も無之と奉存候間。川口より川上迄。此度相渡し候様示談仕。山道堺ハ義ゝ。往古ホンケネカよりシカルシナイ迄ヲ有之候間。右様ヲ仰渡され候ハヾ。雙方不都合の義も無御座候。熟談相整候上ゟ。以來御上様へ御苦勞相掛け申間敷候。依之連印仕。熟談書。奉差上候以上。

根室年寄　宅藏

同　仁助

安政四巳年三月廿四日　　總年寄　陳　平
同　新左衛門
庄屋　四郎左衛門
厚岸御役所様
右の通通辨奉申上候處相違無御座候以上
根室通詞　鍊　藏

西別一件書

○鴈鴨の事

鴈鴨ハ常世國ゟ飛ると云諺を疑ひしゟ予天明六丙午の夏得撫島ゟ渡海せしゟ鴈鴨ハ例年五月頃此島

邊ゟ歸り住せと。土人の物語なり。予も切觀したり。此嶋より凡二十里許。艮ゟ當りて。新知と云大嶋なり。此嶋ゟ沼なりて鴈鴨住り。是より又艮ゟ當る嶋々より皆鴈鴨出ると云。猶東察加及びオホツカ邊ハ夥しく群集し。夏中ゟ巣を造り。雛を持て哺啜養育せといへり。赤人の國法ゟて。夏中ハ鴈鴨を獵せる事を禁ぜと。雛も漸々成長して。秋も末頃より。亦南方の諸國へ。赴らんとする頃ゟ至りて。獵業を免許あるより。鴈鴨を夥しく捕て。彼國冬中の食粮とする事なり。此說イシユヨサスノスコイ共ゞ物語せり。蝦夷草紙

○千嶋の事

東海得撫島より前路。新知島より東察加地方ゟ至るまで。凡千餘島ゟ成る丑寅ゟ流る。所謂千島ゟて。蝦夷人之を稱してチユブカと云。チユプカとゝ。日出處といふの義ゟ。其嶋の大なるもの十六。小なるもの其數をしらず。古昔皆我蝦夷ゟ屬嶋たりしゟ。八十年前正德年中。露西亞人東察加併呑してより。漸々ゟ諸島を蠶食して。三十年前より新知迄を服從して。其嶋々ゟ名を改めて。露西亞ゟ名となし。二十年前より夷人の風俗をかへて。露西亞の風俗となし。往古より日本ゟ

屬せし蝦夷をして髪を組み帽子を被り股引を用ひ靴を穿ち鉄炮玉藥を與へ露西亞人に言をつらひ露西亞の佛を頸に掛け露西亞より役人並にコウロウイシヤムといふ教法師をして時々諸嶋に至り撫順せしめ其夷人も盡く露西亞に貢を納るゝに至らしめ十年前より得撫島に到りて土着し傲然として去らざるに至る東察加をクルムセに國地にして本我蝦夷の種族なり其地今露西亞北海に要津となる嘆ぜべきにならばやチユブカ諸島の地理前輩の圖書大抵疎漏少からば天明中最上常矩嘗て得撫島に至

り。露西亞人イシユヨテケタヨ邂逅して。其大略を得たり。然れども未ゞ詳かる事を得ば。寛政十二年。守重奉命して。擇捉嶋を按察し。露西亞の建たる十字の捧杭を倒し。同嶋カムイワツカヲイヨ於て木を立て。日本の標とゝ。翌年擇捉嶋を新開し。露西亞人ヨ變さる所の風俗を改て。本邦の風俗となゝ。時ヨチユプカ夷人。チヤンゲンシ來て投化さ。イチヤンゲンシさ。ラクヨウ嶋の産なり。其子イモンケセツクルも共ヨ。本邦の風俗を仰ぎぬ。則イチヤンケンシを改て。市助と名て。市助曾て東察加地方へ往來し。能く針路を辨し。其

嶋嶼畧泊地なる所と。風順汐路地宜き所を知る。於是守重。米を紙上ゟ聚て。島形を作らしめ。語問講究し。擇捉の酋長。イコトイ及ハツコ。其他ゑゝ〳〵チユプカ諸嶋へ。往來經過せる夷人ハ。ウシビタカロクイベツケウシ等と。再三討論して。初て諸島の形勢詳かる事を得さり。加ふるゟ蠻人の說を以てし。邦弗加考を作る。

○得撫島露西亞人改名オトセナツサトイと云

此島今本邦と露西亞と分界地とかれ。擇捉島カムイワツカクイより。得撫島オカイワタヲ迄。渡海凡十六七里寅ゟ當る。周回凡七八十里もあるべし。港泊

を東邊をトホ。深凡六尋西邊ハワニナウまあり。此地古來より。擇捉國後根室厚岸四郡の夷人等。露西亞人とも。古來より臘虎獵せし所あり。然るども土着の夷ハどハ。夏秋の間集り漁をるのみまして。時として越年はるものもあり。露西亞人を。日本より多く此地ま越年せ。三十年前。露西亞人と蝦夷人と。北嶋ま於て爭鬪あり。それより後。新知前路ハ夷人。盡く露西亞の屬となる。寛政七年。露西亞人一時ま六十人渡來。漸々ま歸國し。其中ケ子トフミ其外十七人居殘りて。今ま此嶋ま在留し女三人あり。生む所の子既ま七八歳ま及べ

シユイニの類。山々カヒヲスフリ。則擇捉より見ゆ。其周囲々。西邊々。オカイウタラより。チブトヲヘツまで一日路。夫よりロッチンまで一日路。それよりウッ子ツブまで一日路。夫よりシンムコまで一日路。合せ四日路。東邊々。オカイワテよりトボ迄一日路。それよりアタツトイまで一日路。夫よりアトイヤまで一日路。合せ三日路よして盡るなり。但得撫嶋按檢ハ。天明六年官初て。山口某最上常矩を遣し。寛政三年官又最上常矩和田某を遣し。その後松前より一度人を遣し。享和元年官又冨山保高深山某を遣し。俱ゟ其地ゟ於て。

ンユイニの類。山々カヒヲスフリ。則擇捉より見ゆ。其周囲々。西邊々。オカイウタラより。チブトヲヘッまで一日路。夫よりロッチンまで一日路。それよりウッ子ツブまで一日路。夫よりシンムコまで一日路。合せ四日路。東邊々。オカイワテよりトボ迄一日路。それよりアタツトイまで一日路。夫よりアトイヤまで一日路。合せ三日路よして盡るなり。但得撫嶋按檢ハ。天明六年官初て。山口某最上常矩を遣し。寛政三年官又最上常矩和田某を遣し。その後松前より一度人を遣し。享和元年官又冨山保高深山某を遣し。俱ゟ其地ゟ於て。

露西亞人ゐ邂逅せと云

○ヤンケチリポイ島露西亞人改名ヤムナッサトイ

得撫島より渡海凡二十里。周囲一日路港泊なし。巖石の上へ寄り木を渡して。夷舟を揚置なり。木も一切なし。草のみ生ぜ。魚も少し。唯ヱトビリカと云鳥のみヱトも嘴ピリカハ美の夷言ゐして。此鳥の嘴赤くてうちくしきゐよりて名く。

夥しく群飛し。手を以て容易ゐ捕得べき程なり。夷人此島へ渡せバ。此鳥をのみ食料とし。其骨を拾て薪とせ。此島ゐカムイワッカと云へる泉ゐり。岩砂の間ゐ

り僅一碗わどづゝ涌出る。色香とも全く辛き酒の如し。久しく酌置けバ甘くなり。其側ゐて酒の噂すきバ。忽ゐ水涸きて。又別の所へ涌出。酒を釀せし桶を持ち行てゐ泉出ぞと云。實ゐ奇水なり。露西亞人此泉を名てキスウトタと云。

蠻書ゐ云。クリルの諸嶋ゐ。酒泉を出ぞ嶋ありり。蝦夷人來て之を汲て還るものありきども。海上を經るゐ至て。悉く常の水ゐ變ひるなり。

此酒泉の外ゐ水一滴もなし。又カチコロと云鳥ありり。大さ燕の如く。羽ぞ白黑なり。之をとれバ口より油を

吐出さと。此島も古來擇捉夷人。臘虎獵として渡海さと。

○レブンチリボイ島（レブンとも夷語の沖と云言なり）

此島大さヤンケヨ同し臘虎住めり。

○マカンルヽ島（露西亞人改名ヘセウヒ）

此島大さチリボイヨ同じ。臘虎トヾなり。木ふし。夷人此島へ至きバ。ヱトビリカ鳥を捕て食料とねし。其骨を燒て薪とし。此鳥夥しくして。內地の鮭鱒の多ぎ如し。此島も。古來より擇捉夷人の臘虎獵場なり。

○ラッコ島

此島ハ。擇捉島得撫島の東洋ニ當れり。晴天ニそ海上遥ニ見ゆ。此地本クルムセの夷人嶋なりしニ。近來露西亞ニ併呑せられ。その風俗も變せり。此嶋ニ夷人多く住て。露西亞舟ニも乘り居るなり。露西亞人。得撫島ワニナウより出帆して此島ニ渡海せ。此島夷人そ皆鼻へ穴を穿ち環を通せ。露西亞の文字を習ひ物を書なり。其夷人名をキモヘイと云もの。得撫島の露西亞人の許ニ來て。其本國の舟を造る。其製舟トヾの皮ニて張り。袋の如くニ拵へ。中ニそ木を骨ニ入せ。夷人一人乘りて。袋の口をしめ切り。水のいらざるやうニし。

櫂ゐて左右へ搔き走り。陸へ上れば骨を去り。皮を疊みたくなり。此舟を夷人ハトシトチツブと云。露西亞人ハマイタレと云。國後の酋長ツキノエ嘗て云。クルムセの舟を見しことゐりしゐ。小船を皮ゐて包み。巾着の口の如ゐして。其口へ身を容れ皮袋ゐ口をしめ切り。底へ石ゐどを入れ舟を重くせ。いのおる大浪ゐても鳥の浮ぶが如く。舟も人も波の中へくぐて入りて。又浮く事自在ゐり。クルムセの人此舟ゐ乘り。沖ゐて鳥を逐を見しが。兩手ゐ弓矢を持ち。舟を櫂を動したり。思ふゐ袋の中ゐ糸ゐどの仕掛ゐりて。足ゐ

て櫂を動らいならんと。厚岸酋長イコトイ并イチヤンゲムシ云。クルムセの夷人も。トイチセコツチヤカムイの裔なり。老夷傳へ云。古へ夷地トイチセコツチヤカムイと云もの有り。其身甚短し皆穴居す。夷地開くるに從ひ漸々に奥地へ入り。遂に其種族相率ひて。筏に乘り。東洋のラツコ嶋へ往きて。其部落をなせりと。又東察加にもクルムセの種類有り。

○新知島露西亞人改名セムナツサトイ

此嶋を得撫ふりハ少し小なり。レブシチリボイより。新知島モヨロへ渡海也。

此渡りの汐路を。擇捉の渡よりハ弱しと云。ハロンノッの汐ハ強し。

順風を酉を吉とし。順風上洋なれば。早天ヨチリボイを發し。力を盡して舟を行り。黄昏ヨ新知着船せと云。三十里内外もあるべし。此嶋の前路みお本邦の屬夷ありしヨ。三十年前より露西亞ヨ服從し。それより二十年前以來。夷人悉く露西亞の風俗ヨ變じて。男女とも髪組み帽子を被り。股引靴を着し。佛像を掛。鋏炮を持つ。露西亞役人も時々來るおり。

寛政十年。露西亞の役人。三人此地まで來り越年し。

翌年歸國ハ。本國の頭役替。又金銀吹き直しなどし
たとを。知らする爲めゝ來ると云。下略邊要分界圖考

○唐太島の事

蝦夷地宗谷の北ゝあゝり。海峽を隔る大地を。唐太と
稱ゝ。カラフトを唐人あり。我邦愚俗異邦を汎稱して
カラといふ。フトとゝ北人。ヒトといふ言ゝ訛なり。何
を以てこの。カラフトと稱ゝるといふゝ。彼より漢製の
諸品を携來るものなりて。これと
サンダといふ由。本邦山丹の字を填て通稱とせり。
按ゝるゝ近藤氏。邊要分界圖考曰。山丹の部落ハカ

ラフトの奥邊。マンコ大河の河口より。サンタキ子イチヨボツト邊までゝ居ると云ハ。黑龍江口の北邊より。其江ゝ注ぐ小河なり。堪達河といふ。恐くハ山丹ハ此訛ならん。又寧古塔ゝ東ゝ堪達山なり。然れバ非歟ばゝして。其正實をゝらバ。

宗谷の夷人と交易をゝる事年久し。其齎をゝ所の品物を。所謂ダンギレ。虫の靖。烟管山丹語ユアイチの類。種々なり。漸々ゝ迷を本地ゝ傳ふ。これ我夷種とゝ異なれる人々持來る故ゝ。江差松前の商賈ども。これをきゝ受て泛然として。カラフトとよぶことゝなり。終ゝ其北夷ゝ

地名のゆうゐなきりと見えたり。固より彼地ゐ渡海もせざきば。其涯際を極めば。唯カラフト。々々々々と稱ゐる事ゐ。なり來りし事ときこゆ。諸國の地名ゐ此類尤多し。近時開拓の事なりて。二三田點撿の人々をつかもさきしも。未ざその地の限奥找究めぢときけり。今茲文化六年己巳秋七月。此地を新さゐ北蝦夷と稱ゐべきの命なり。故ゐ予此編を北夷考證と題ぢるもこれゐ由るなり。北夷考証

○攝津の漁夫蝦夷へ漂流の事

爰ゐ一つ此物語なり。むかし攝津國大物の浦なる。漁

師三人。いまゞ志の〳〵めゝ船をうゝべ。そるのゝ沖ゝ網ひきて。ひめもゝ漁すし。世ゝいとゝゝみをゝしたりそるゝ。折ふし秋のそゞめ。朝心地よく沖中をこゝよかしこよと心ゝ如く乘廻しけるゝ。心ゝ我うゞ〳〵き。武庫山おろしゝか〳〵す來るべき雲見えたるも志らぎして。唯漁業のゝみゝおもひ入て働居たりしゝ。播磨の國書寫山おろしと。一同ゝ吹おろ志程ゝ。そぎこの漁船の事ゝあれゞ。大海ゝ漂ふ事。一と葉ゝ塵よりも猶かろくして。吹來る風ゝ先立てうかみ行ほどゝそゝれ。船中のもゝども。いつ網を放ちたりそるやも覺えゞ。

三人ともに小船の底に臥して。兩手い船ぞうにとり
はきねがら。醉たる心地して。腹中の食を吐き。或ハ鼻
血出て總身ちぶ迷もくり。今をかぎりとのみ思ひう
ろぶひ。なゞ迷て行末もこのおく。沖中へそらひ出され
々りがくて中略夢中に影ハ知きもの來ると見えてけ
迷ば。甲冑を帶たる人にて有々り。船人どもはひにめ
なれぬ出立ハ迷ば。夢心地にも是こそいとゆる軍人
なるべ々れど。左右おく寄はこのぼして。扱いろなる御
方にてもくらせたまふぞとうろぶひ々迷ども。さら
に答へ給ぞして。遥にかゝへの方へ指さし給ふを

見迷ハ。大なる鳥のむらがりて。雲ゐ遊ぶ有さまなり。
ゑ。あ〳〵ものぐるしゆめのごとも思ひ〻れ共。尋常の人か
らざる御方は導給ふ。中略一人心き〳〵たるもの。海面ゐ
眼をかけ。北國ゐ住鳥ゐて。島ごゑといふ鳥なり。此鳥
沖中へ飛行事二十里許は間ゐて。魚找とるものなり。
ちら〳〵見えたるゑかは鳥ゐて有べし。ゑうらハ遠く
とも岸ゐ二十里近くハまゝ幸なるべし。櫓櫂を立て。
神力佛力を祈り乘付べしと。泌汰し〻る程こそなき。
三四日の間食せざきども。若きもの共のかゝじけな
さゐ。ゑひ〳〵聲して鳥の行方を目當ゐ押行〻り。實ゐ

一人の金言に引立られ。もろともに手を合せて漕ほどに。霧はまぶかく木草はかすらに見えわるゆゑ。磯ぞいへ押つけうきしさ餘りて。三人ながら覺えず聲を立て泣出し。岩に船をたなぎ心ちづかに上りて見れば。嶮岨の山は出鼻にして。通ふべき道もなく。まこと方角とてもわきまえざれば。島ゝ國ゝと疑ひながら。岸づたひに行方もなく歩行しに。廣き砂原に出たり。いまだ霧霞深くして。遠く見とほす事ならざれども。浪打際に素足にて踏たる跡なり。是に大に氣を得て。其跡をたどりて行けるに。一つは住家なり。中略何にしも物

問ゑんと立寄りて。其内我さしのぞき見きバ。異形の人親子三人居たりゝり。日本國ゑて見ゐれざる人なきバ。少しもたぢたらしらども。かくてそはてぜと戸口ゑより。少し頭をさげて。ゆるし候へといふ風情をゐらゑしゝれバ。そのゐるじゐるもの。平ゑ坐して兩手を上ていゑく。アシンナ。アシリオンガミヤンガラブツテといふて。その言葉さらゑ通せぜ。さなゞらおそろしき風情ゑもゐらぜして。何ゝめづらしくもてゐきゐりさまなりゝきバ。さま〳〵ゑして禮をのべたり。ゐるじのもゆ又いゑく。ヤニシイシヒ。オカイタン

バ。アシンナアルキヤといひたまども。まゞもこのらざ
まバ、手ゐのせゐぎる心地して。さらゐをらしき事も
おく。唯とうもくして立たりしが。連れ内心き〳〵たる
ものいもく。何ゆうゐもして。食事は事をまうして。一
飯をもとめたきものゐまども。別ゐねもべき仕方ね
し。去ゐても五日以前本國は飯を食せしより。おのか
〳〵船中ゐて藁をかみたるぞらすねれバ。兎ゐも角ゐ
もとらえバやと。やゞて彼のもの〳〵そぞゐ寄すて。腹
をたゝきロをたゝきて見せたりゝまバ。かのゐるじ
も。空腹なるといふ事残さとりしと見えて。直ゐ立て

鮭は干て有けるを出して。少し火にあぶて引裂て。三人はものゝ呉さたり。實に天然の理にして。物いふ事も通ぜざれども。普天の下皆同じき人心なるものやらむとさゝやきねごらそのたまもの〳〵鮭を。少しづゝ食せしほどに。其うまき事たとふべきものゝならじ。大によろこび禮謝して居たりゝさば。ほどなく飯を出しゝるを見さば。玄米にて煮たるものはにして。勿論その器物なしゝ。お手にて食せる事なり。此時一尺有餘はへらの如き物の。さこしをりは有ほり物の有ものを出し。右は手に持て。その飯を入たるもの〳〵うへを。

左右へ供し。まゝ向ふへ供し。其言葉ゐオキクルミ々々々々と三べんとゐへたり。此オキクルミといふ言。我國ゐて源義経公。西海ゐ亂を鎮めたまひしのち。蝦夷國ゐ渡り給ひてより。蝦夷人末ゐ世ゐ至りても。判官殿をオキクルミと。ゐつゞめ奉るよし聞傳へたる事。耳底ゐ残りたりしを思ひ出し。さてそ蝦夷國ゐるべしと初て心づきたりそりつ。つら〳〵思ひ合せきバ。四日以前東海の船中ゐて。夢見ゝる御姿甲冑といひ。又御そらせの太刀ゐ虎の皮の鞘巻なる御出立。是ぞ此國へ押渡るべき。前表の正夢ゐてゐりそるものゐる

べし。實ハ義經公の今ハ大靈おハしまさ事。凡人ハさ
とぞをもつて申もその恐まさくあらむ。中略終ハ其
夜ハ心ゆるみて。宵より睡眠をもよふし。いつしの心
よく寐入ぬる。扨ハ行くまバ。あるじ袖を引きていそく。
オマシヤシヤマニシイシヤヒオカイアルキアンと
いふて出行ゆゑハ。何いふ事やらんと見さりぬるハ。
又立歸りて袖を引く事急あり〻れバ。其跡ハはきて
出て行ハ。や〻三里ばかりも行たる頃。向ふハ一つハ
出崎ハる所ハ。家十二三見えて〻まバ。かのもハ指さ
していそく。ネシヤマニ。ヌカル。イクシタオマンアン

といふてほゝゑみて先おたちて其家のありける所
ゟ至りなる此所おいさりて見まゝ日本船來りて遠
淺の沖ゟかゝり帆を干てあり まゝ日本人出歩行往
來するもあり是を見て大ゟ悦びてかの蝦夷人ゟ先
たちて行程ゟ日本人七八人居さる一つ家ゟ着たり
此もの共も又悦ふ事限りなく先事はゆうを我問そ
れたまども胸うちふさがりて答ふる事ならさそゝ暫
しハ袖をひたしたりしが漸々ゟして物語しなれ
バ此ものども不思義ゟも命助のりなるよと世ゟも
頼もしくいさそう我等ゟ仙臺の者なるゝ當年秋味

をはみゐ來りやゞて出船せべし。其節我等が舟ゐて
もくるしからぜゝ。同船し給ふべしとかゝくやくそ
くをかゝめ。その日より睦まじく此處ゐとゞまり。下略

蝦夷見聞誌

○義經蝦夷并滿州へ渡海の事

九郎源判官義經朝臣の。此地へ渡り給ひしことゝ。正
史ゐ殘せるゐとなきをもて。桃太郎は鬼が島話と同
やうゐ云なす人なり。ゐろ〻どもつくゞ是を考ふる
ゐ。實ゐ源廷尉の神機才略計膽の雙なきゐと。逆櫓の
論。一の谷の英略ゐつきてもゐらるゝ也。疑ふべきゐ

ならび。高館を落のび給ひて。主従もづゝ十餘人ゐし
て。奥の津輕に三馬屋より。今に松前の湊ハ。むかし津
輕津といふて。津輕への渡海の津ゐて有ゝるゞ。それ
へ渡り給ひ。是よりして此所彼所をもぎて。東部沙流
の邊ゐさまよひ給ひ。アツマゐる川にぢへ入て。夷人
に家ゐ滯留ましゝ。此地の酋長どもをかさらひ。再び
西地へ越。今の江差の邊。熊石より大田邊を經て。島牧
歌棄石狩より。北蝦夷へ渡り給ひしゐやとたもハる。
蝦夷人朝夕義經朝臣の神機才略にをどを尊とゑ。此
所ゐてハかゝる事に有し。彼所ゐてハ去のゝの事有

しと云傳へ。蝦夷淨瑠理といふもはなも。其大略をのらえし。酒宴は後ハこのあらぶ是を謠ふことなり。扨其故を探索はるゐ。源廷尉の此地ゑ渡り給ひしと云ハ。疑ひもなきことゝしれもそる。先その土人は云傳ふるところの一二をゝ〳〵ゑるゐ。奥州津輕領なる三馬屋港ハ。前ゑもいふ松前へは渡海場ゑして。纜ゑ帶水もて。白神岬と對しゝるゞ。此所の海岸ゑ一つの奇岸ゐり。高さ三丈餘。巾凡五丈。横一丈ぞゐり。上ゑ多。古松繁茂したり。此所より先の村々ハみゑ蝦夷人は住よしゑて。奇岩怪石重疊として。馬蹄ハ元より人足だ

ゐも立がさき故ゐ。自ら乘給ひたる馬と。龜井六郎伊勢ゝ三郎の馬とゝの岩穴ゐつなぎ。いとおつらしくも。此所と立出。九折數百歩上ゐる山ゐ登りて。蝦夷地と見やり。首ゐかけ給ふ一躰の十一面觀世音薩陀の像を。此所ゝ古松ゝ枝ゐかけて。主從の行末の事と祈りたまふ。こゝより藤嶋村算用石村釜の澤村へ到り給ひゝるゞ。此英雄ざゐも嶮岨の苦辛ゐ堪給ハざりしや。甲と脱て海岸ゐ投捨。今ゐ甲石と云ふなり元宇鋏村ゐ到り。上宇鋏へ出て龍飛の岬へ到り。此所ゐて鎧を脱て海岸ゐ投捨。鎧岩といふなり大岩の上ゐ帶ときて。向ふへ游

き渡らんとし給し時は。今は帶とき石といふなり つゐぎ置給ひし馬。そでは龍馬と化して此所へ飛來り。主從の人を騎せて。向方は島根をさして飛去りしとぞ。今も此所を龍馬岬と云しゞ。何時となく馬といふ訓を省きて。龍飛岬とぞあきうゝる。扨松前は城下ある阿呼寺ハ。渡海山と號して。義經朝臣此地へ渡海の時。先清らかなる地を見定めて。一宇は寺を建立まし〳〵。自らの像を刻して。上ある山は納め置給ひしゞ。是もいつゝ形像の似さるより。將軍地藏の像となし。今は地藏山といふ。まゝ東部沙流の内ある。アツマは酋長の家なゝ。

現ゐ滞留ましくだりとて。今ゐその時の事を申傳ふるなり。江差の鷗嶋ゐも。六韜三略ゐ巻を隠したまひしといふ岩窟も殘迯り。龍馬の蹄石といふものも有。西地島牧より壽都の間ゐハ。辨慶の粟畑。ライデン岬ゐハ。辨慶の太刀ゝけ石。唐太の白主ゐハ。義經朝臣の城跡ゐど〳〵。夷人ゐ口碑ゐ殘ることなり。今ハ義經朝臣をオキクルミといひ。あくハ判官さまとも云。辨慶をシヤマイクルといふて。朝夕尊敬たこさる事なし。只一盃の酒を呑ゐも。先其盃の上ゐ飲箸といふものを乘せて。此箸ゐ先ゐ其酒を少しひさし三度手向。そ

れよりその箸まて髭を撫上て呑ねり。その手向る一滴い造島の神。二滴判官さま。三滴目ハ大江戸の神さまへ。手向と云傳へ々るゞ。其殊勝實ま恥べきまなまゞ有たとなり。蝦夷葉那志

龍馬山觀世音菩薩略縁記。抑當山正觀世音菩薩の由來を尋奉きバ。人皇五十二代清和天皇の後胤。九郎判官源義經公の。御兄頼朝公と御中不和まならせ給ひて。後當國へ下り秀衡を頼み。高館の城ま籠り給ひしゝとも。終ま落城し。其後難を遁きんゞ爲ま。蝦夷へ渡らんとて。此三馬ゞ浦ま來る。折節波風をげしくて。龍

飛の汐起り。海渡るべきゆうなし。是によつて義経公。自ら海邊の巖に頂上に登り端坐して。一心に觀世音菩薩に祈誓し奉り。薩埵に威力を以て。蝦夷地へ渡るべしと祈る事三日三夜なり。丹誠まことにかりて。神霊のやまさば感應ましくて。觀世音菩薩白髪の老翁と變現ましまひ。義經公に告て曰。汝至誠に祈る所の願望によつて忽ちに成就せ。今汝に龍馬三疋を與ふるなり。此馬に乘つて容易く波濤を渡るべしと云々。有難さの餘り歡の泪袂をぬぐり。巖上より下りて海邊へ向へば。三疋の龍馬浦風に嘶來る。是をとらへて則

巖岸よつあぐ。此因縁有るよよつて。此里を三馬屋と名付るとなり。其龍馬の蹄の跡。今以て巖上よ歴々として残る。

此蹄跡事を僧よ尋しよ。岩崩塞して分明ならぬと云。

其後ハ龍飛の汐も起らぬ。波風も静りぬ。是よ依て酬徳の爲義經公みづから帯せらるゝ所此。太刀此目貫の金を以。御丈一寸餘の正觀音を刻み。巖上よ安置し奉る。夫より船よ乘て。數百騎の軍勢を引卒し。難なく蝦夷地へたし渡り。蝦夷を切靡け。韃靼へ責入。切取て。

爰ゝ子孫を傳ふると。觀世音より授りし龍馬今以て蝦夷地ゝ存命して居るとのや。大明國へ責入國主を退けて。南京を靜め。唐の國號を清と改る事ハ。義經の末葉清和源氏たるゞ故ゝ。清ゝ字を用ふなりと。日本より南京の系圖を尋させらきしのバ。天照神の御末。清和源氏ゝ後胤ありと。唐土より返翰有しと。未曾有の記

滿州人ゝ。源義經蝦夷より滿州へ入し事ゝ。度々たづ祢しに。聢とせし証據もあら祢ども。當時漢土ゝ天子も。日本人の末なりといふ事承り傳ふと。ぺごとゝ答へたり。思ふゝ蝦夷へ行し。我國人の言葉を聞傳へた

るまてもなりけんこ。併一の證據ともなるべきも。唐土の地を出離まマンコ川を五十里ぞかりのぼりてオレヒと云し所ま。青石ま錐の樣なるものまて彫付し。二疋の画なるを見たり。其筆勢いりまも我國ま画法まして全く異國の人ま筆法まならば。土人も是ハ日本人の筆ま よし云つさへ。林藏まも試ま書て見よと所望せしのども。筆拙くきバとて辭して止ぬ。右ま馬の画。もしや義經又ハ義經從者ま画きしまも有べき歟。蝦夷地ま辨慶崎と云所なるを以て証據とせしハ。正しく世人ま なのやまりまて。蝦夷言葉まヘンケ

ルと云言語なり。右の地ハヘンケルサキよりして。辨慶よりそならじとぞ。窮髮紀譚

○義經武威の事

蝦夷島漂着記よ。九郎判官義經公。奥州より彼地へ渡給ひ。神武の德を以て。彼蝦夷共を伏せしめ給ひてよ日本の神武よりなびき隨ひし由云り。千島志料

○義經東察加地方よ到る事

東蝦夷地厚岸。ならひよ沙流紋別といふ處よりおひて。乙名どものもふしを聞よ。むかし源廷尉義經朝臣辨慶の兩將よハ。沙流の川上なるハイヒラといふ處よ

居て。枯木と鷲の嘴とを多くあつめて柵とおし。又下鵜川キロ、井山中へ往來せしが。カニケシチカツフといへる。金色の羽の鷲は通りたるを見て。相とものおは鷲を追ふて。ポンルヽカは國おいたを給ふといふ。

此ポンルヽカ國の事を老夷おとへども。いづくといふ知きさをしが。チュツカ夷人イチヤンゲムシおカムサズカ地方の事をとひしおカムサズカの海口をとハ。ポンルヽカといひて。蝦夷クルムセの國ゐり。今ハ露西亞人名を改めて。ベストフアビル

スゴイといふといつり。こゝまおひてもどめてポンルヽカ國の名ハ聞得こゝり。則クルムセも。此島往古のトイチセコツチヤカムイといへる蝦夷人の末裔の夷人なり。續蝦夷草紙

○義經事蹟の事

東蝦夷地沙流といふ處ハ。源判官義經の社といふ有て祭るよしなり。則強夷オニヒシといふもの〳〵村ハ。則此沙流といふ處より出たりといふ。此處ハむかし仙人住て。山中の岩窟ハこもりて居たりきと北海隨筆

蝦夷人義經の事をオキクルミといふ。辨慶をバその

儘ゝて唱ふ。義經むらし此國のハイといふ所へ渡り。蝦夷の大將分の娘ゝちなみて。蝦夷ゞ秘藏の卷物ゝ取さる由を。日本ゝ淨瑠理のゆうゝらさりつさふるを。蝦夷人の中ゝて。智恵勝さるゝゝ共語る由なり。義經をバ殊の外ゝ崇敬致し。其城跡へゝ足蹈ゝせざるゝし。右城の石垣ゝゝ。ゝりかくと云魚の嘴ゝて築立ゝ由。右の魚嘴ゝ長さハ九尺ゝて鋏の如く。數百年を經とゝ折る事なしとゝり。右城跡石垣今ゝ存在せ。蝦夷記

矢越岬ハ。白神岬と箱館の間ゝゝり。傳へいふ古昔邪

鬼此に住せしまおり。舟の往來せる事なかりしが判官矢残射て始て海路開けり。故に今にいたるまで往來は船中必岬に向ひて矢を放つを例とせり。辨慶岬を。西蝦夷須築にあり。古昔判官此地より異邦に渡りしと云り。

來年岬は。同磯谷にあり。辨慶蝦夷人に來年歸る事を約せし地なりといへり。

カメツボシ岬は。同濱益より雄冬泊の間にあり。昔辨慶此峯に住せりといふ。館野瑞元書に。プヨマイ。同斜里と知床とは間カムイコタンは西のこなにあり。此

所ゝ義經の鯨燒石。鯨逃穴といふものゝあり。シノタイハ。東蝦夷勇拂場所エハフより。一里二十七丁ゝあり。此所方三間ゝ造迄る義經の社あり。ハイヒラ山ハ。同佐瑠太より五里十八丁。ピラトリ社西のゝゝあり。山中義經を祀る古社あり。ハイゝ同涤退(ミチナヤリ)より西三里ゝあり。義經の假ゝ住居せし所ゝあり。故ゝ此地ゝある夷人をハイクルとよべり。クルゝ衆社儀ゝして尊ゝ意あり。シヤムシヤインの亂ゝ此地の酋長オテヒシ。ハイクル社故をもつて。日本人ゝ叛らぶして。シヤムシヤインと數年鬪爭をあせしとい

所ゝ義經の鯨燒石。鯨逃穴といふものゝあり。
シノタイハ。東蝦夷勇拂場所エハフより。一里二十七
丁ゝあり。此所方三間ゝ造る義經の社あり。
ハイヒラ山ハ。同佐瑠太より五里十八丁。ピラトリ社
西のゝゝあり。山中義經を祀る古社あり。ハイ毛同
涤退(ヒナヤリ)より西三里ゝあり。義經の假ゝ住居せし所ゝあり。
故ゝ此地ゝあるる夷人をハイクルとよべり。クルを衆
社儀ゝして尊ゝ意あり。シヤムシヤインの亂ゝ。此地
の酋長オニヒシ。ハイクル社故をもつて。日本人ゝ叛
らぶして。シヤムシヤインと數年鬪爭をなせしとい

エトロウを鼻。フを緒。ワタラを岩と云義なり。此二人を義經と辨慶の兩人ありと云說ありとども。詳ある事をえらば。蝦夷草紙

ロ蝦夷の方を。粟稗大小豆を作り附相貯へ。粟をモンシロ。稗をヒヤバと唱へ。昔義經朝臣此地へ來り給ひし時。播種をえらばしめし由申傳へ。已ゐ沙流并鵡川ゐ。義經朝臣の故居とて。夷人幣束を建る所有之云々。此國後島ハ。周廻百里ゐ不過といへども。名山奇石實ゐ天造の妙域。セトキといへるゐ。海中より温泉沸騰し。クサリチといふを。自然の方石巾六七寸長凡一丈半。

或ハ丈許あるゞ。纍々と相重りて。鎧の草摺のごとく。其傍ゟ男形ゟ石ゟり。まゝ其傍の山上ゟ。方石長二三尺あるゟ。井幹(イゲタ)を組しもの凡六七ゟり。平地ゟ右の小石波浪ゟ磨して。龜甲ゟ如く奇々妙々不可言。夷人も。昔源豫州此地へ甲冑を置給ひしゞ。化して石となり。其井幹ハ。熊を畜給ふ所と云傳ふ。不佞ハ孔明魚腹浦八陣石ゟごとく。公旌旗を建給ひしゟ。又六花様の隊伍を試ら迄し遺跡ゟとも見し。夫よりイエレシコマ。紫黒の角石。其上頭ハ。種々の形をなせしゞ。二町ぞかゞ程。屏風の如くゟ立並び。海水相映じて如画。オクチ

ツプといふ砂山ハ。夏中穿ちと三尺ゐきバ。砂下皆雪
ゐて。是も源豫州ハ舟化して砂とゐるゐし云傳ふ。亦
沙流鵡川静内へ罷越。義經の古跡を訪ひしゐ。沙流の
川上ハイヒラといふハ。昔判官此山上ゐハイといへ
る魚吻を立て。則加持祈禱をし。居を構へ給ひし所ゐ
て。世ゐ判官ハ面大王ハ女ゐ通ぜらきしゐ。大王怒て
逐々きバ。長刀を執て擢とゐし逃去給ふ。今の車擢ゑ
其遺風ゐりといひ傳ふ。此所の夷人ゐ。風俗家居も格
別ゐろしく。ハイクルとて。夷中ゐ稱せらきしゐし。亦
同所より。凡十里餘鵡川の川上。キロルイといへる山

上ム。判官の來りて魚を釣。幣を立給ひし所とて。今尚其故跡なり。又古き甲冑所藏の夷ありて。近藤巡夷録知床字クシヤラキウレ。ワツカエタラ此邊暗礁多し。一擢をなやまさば。其岩角ム打碎きん事を。カモイエバ大岩怪岩頓蛇(トツコカモイ)の頸の如く海ム差出。爰ム一つ此昔話ハ。辨慶の妹ある者。此所ム住々るム。其を呑んと大蛇ゞ來りしを。辨慶蹈潰したるゞ。化して岩と成しと。其時傍ム五柱の神ゞ立て居給ふと見えしゞ。則此五本の岩ありとて。今アシキ子シユマ五岩とてなるなり。オラウシヲハエト岩岬キヤルマイ石門ム。辨慶妹大蛇ム追

ハき迯來り。此穴より覗居たりしと。其上ゟオフイ岳。
まさ知床岳とも云り。義經様此上ゟて軍勢を集め給
ふ時。烽火立給ひしと。オフイを燒と云言なり。ホロム
イ大灣上ゟホロムイ岳。其下ゟホロソウ大瀧並てイマニ
ソウレ立岩串多と云所ハ柱石重れり。昔義經魚を串ゟ
刺て燒。其殘を捨置きしの。石と化せしと云傳ふなり。
まさウカウフ平濵といふ所。黑白ハ小石美しく接り敷
たり。並てエンヨマヲマナイと云小瀧なり。さゝゟ義
經公野宿し給ひし時ゟ。席を投捨たまひし故事ハ。オ
シユンクシエト元岬是第五岬なり。チフシケヲロ岩磯と

云所ゐて。義經公の船破きしゐ依て號く。チヤラセナイ瀧オヘケフ川小爰ゐて。義經公ハ舟へ垢多く入。沉まんとせしと。漸く汲捨助り給ひしとぞ。知床日誌

御冠崎ハ。汀より四五丁沖ゐ。オカムイと云て。五六丈の立岩なり。

俗相傳曰。昔源廷尉蝦夷漂泊の時。ちの洋ゐ難風ゐ逢ふ故。自着せる所の烏帽子を脫して。ちの岩ゐ投かけ給ひ。不難祈と云々ちゝ稱せと。

形略佛相の立るゞ如きゐ似たる故。蝦夷人神と祭りて尊信せ。

六の故ゑ蝦夷地上下の百船。六の崎をよぎる時ハ。酒供洗米及画馬等を奉り。往々海波の横難と祈る

と云々。

六の間ゑ辨慶一夜、野と云廣野ゐり。辨慶此地ゑ畠を作りて。四方槐樹陰々として。中ゑ曠野ゐる事亦一異なり。

クロイロ村。此郷巡見使監察の涯也。則使蝦夷参向此地。遂拜謁。而蝦夷使前奏夷樂。舞蹈終日。蝦夷君間賓賞也使節頗興嘆。轉賜酒餉。蝦夷性嗜酒。終日飲不知。乃種品の盡夷術總備使覽。所謂百歩發弦穿柳葉。吻披千仞碧波放捕鮮魚矣。又

有稱諷謠者。音律索々如裂縑氤氳。倡者席上仰倒。而屈左右の臂。拍腋下以合の若。謂唯ハウワンと往々在聞矣。時毎日側の夷流涙頻發感聲。呻唫不息。因問譯士。率義經の蝦夷威伏の途。其德云々。可源廷尉知高館の役蟄蝦夷言の是雖俗說不可誣。又城府居住の舊家ゐして紙ゐいくゝともなく包て棟梁の間ゐ收おくもゐ此なり。家人代々云傳ふ。儻誤てゐの笥を開事ならバ。覿面ゐして隻眼ゐるべしと。子孫ゐ至て敢て開くものなし。年を經て家人絶して他人移居ゆ。ゐうゐ彼の箱を訝て披て見るゐ義郎の證文なり。

大豆五斗借用せ時の柳營より辨せべし

武藏守辨慶承之

捧府廳爲重寶今納庫

辨慶崎の酋長。太刀一振家財とせ。さやの内へ米投せるよ。ゐ消失せるゞ如し。ゐの故ゐ米を喰ふ刀ゐりとて甚尊信せ。一年喰ふ事三石餘ゐいたる。奇怪ゐりとて府ゐめせ事ゐり。夷已む事を得ゞ傳來せ。ゐりるゐ沖中ゐして。船行事能ハざれバ。龍神刀を惜る故ゐり迚。鍔ハ海へ投して。龍神ゐ祀り。柄ハ山祇ゐ祭る迚。賜りゐ空ゐ投せし故ゐ。今山中ゐゐきバ。のゞきかへ

るべしと北藩風土記

西蝦夷地六条の沼といふ處ハ。辨慶崎といふあり。義經北高麗の國へ〻より渡りしといふ說ハ。さだゝならざる事なり。古き鍬形兜の有し故。義經の兜ゝとて。崇敬せる事も極め難し。是奥羽ハて合戰ハ時の落人ども。松前ハ渡りて。夷人をなぐさむき。古來英雄の名をかりて。威をふるひし類のものどもなるべし。北海隨筆

今の濱益ハ。一說ハ。ヤマヽシユケハて。アマヽヽ穀物。シユケハ炊くの義なり。昔判官公此處ハて飯を炊

ぎ給ひしとも云う。まゝ此近傍ヨフトムナイ。小川本名マラブトフンナイといふ處ありう。譯て振舞饗應の事也。昔義經公ハ此所ハ土人。海獺を捕て奉りし處なりと。又增毛ヨカムイチヤン岩壁神の城跡と云。義經公昔山越して。ちゝ下り給ひし古跡ありとて。土人等木幣を立て祭るあり。まゝ增毛字ノツト沙岬の沙地。土人小屋つゞく。此所の人家他とも異ヨして。笹垣以て葺き。至て奇麗あり。西蝦夷日記

津輕一統志卷一ヨ。外の濱邊在所ヨて。夷松前渡海要津也。按ヨ文治年中。伊豫守源義經改義行義顯蒙勅勘。使其

追討使頼朝下向奥州。不日責拔衣川高館。剋遁其危難。而津輕之越立野。此所于考不得其所夷嶋可遁去。秀衡遺言ゆ任せ大門坊云者。因勸而零落。義經干斯地至彼嶋。此處繫馬以來名之其厩跡残岩窟存干今。馬三足可立又義經平定夷嶋。而其後入全國謂全其終。因之夷嶋有千島合七百里といふ義經辨慶龜井等所住以其姓名呼嶋之名。同上

圖書云。學忘貝森介右エ門著述なり ゆ云。圖書集成全部一萬卷。清の世ゆ至て編成せる處ゆ。寶暦庚辰清人任繩武なるもの齎來すしと。明和甲申年官庫ゆ納めらるしとなり。書中圖書輯なる書百三十卷ゆり。清帝の自序

なり。其文ハ朕姓源義經の裔。其出清和故號清國と有由なりと記るを見てより。一度其書をみん事を嘆ぜれども。娜環の秘書ハ等しくれば。空しく渴望せるのみ。下略

蝦夷雜書

○雜録追加

○蝦夷人胡沙吹事

日本東北の果ハ。蝦夷といふ嶋なり。此島の人性情他國と異ハして。其形容も異なり。髮赤く髭を二尺餘のむして。海老の姿ハ似さて。此國ハていハしへより。和訓えびせぐたを略して。えびせといふなるよし。松前

より二百里ばかり東の方。厚岸釧路などいふ所まで
も。日本人も常に往來せり。此嶋の人日本人に對し。年
貢の未進。其外何事によらず。理につまりたる時と。ロ
ようコサといふものを吹出しぬ。このコサといふも。
霧煙の如くにして。東西をもくらべ。其うちに何處と
もなく。逃失たりと。落葉集

○擇捉夷人開化の事

擇捉島蕊取（シベトロ）の乙名捨六。まゝ振別の乙名王藏の如き
も。文化度御領となりし時より。歸化して。已に三代の
孫なり。家居も床疊障子なりて。風俗言語皇國の人に

さしてかたらぬ。惜むべし。女子ハ夷俗なりと。ゑりれども外國ゑ隣きる離嶋のかく皇國風ゑうつるたるも。全くその頃わひまで。衣食ゑ乏しく。活業も絶々なるをも。近藤守重をじめて此島へ渡り。且高田屋嘉兵衛の商船。航海をるやうゑ成々れバ。ゑ〜ゑ於て衣食も更なり。酒煙草何く迄とたらをぬものなく。漁具さへそなをり。夷人此時よりして。豊らゑ世をれくるやうゑなりたきバ。エンドカモイのいともかしおく。御恵みの有がさき事を感服なを所ゑら。髫髮(ウナヰ)も取ちげ。髭も剃るやうゑ成たるゑり。當今かの玉藏などの家

まに至るものなれば。上好の茶を煎て。金米糖松風などいふものを菓子となせ。いろまもシヽヤモをなぞむきゝりとぞ。今擇捉まてうたふ謠(ウタ)ま。オヤバヤンヤレ。シヨモヤンヤ。イアニバツテキ。シヽヤモダカ。グツトクノホツケ。まの謠も。例年の稼方として。來たりゐるもの〳〵漁事果て。又シヤモ地へのぼらんとせる時ま。夷女どものうたふ謠なり。其意もまとしシヤモ地へわりれ行て。來年まゝ來るや來らざるやまらまじ。まりしそなゝぞこのりゞシヽヤモまもなりぬぞ。又外のシヽヤモと孫るほどまといふ事なり。まれらハ浮薄

の夷女どものうたふ謠なごら。その人情を見るまたる。東蝦夷夜話

○蝦夷人書簡の事

唐太島の夷人。名をツヽポリンゲといふもの。片假字を書覺えさり。宗谷の番人某方へおくりたる。夷語の書簡なり。其文左の如し。

ヤイカタノ。アンコロカイキ。イトイル。イルレンワ。ヱンコレワン。おれを譯をるよ。御無心なごら。研石をかし給それ。といふ事なり。庚戌雜綴

○化石の生長をる事

土人の傳ふ。太古後方羊蹄(シリベシ)の神。犬の白老(シラオイ)のカモイクシといふ所ゟ來り。日暮ゝる故。さし給ふ櫛をぬきて。それゟ火をともし。其明るゝて濱邊ゟ下り給ひし。その櫛燃て炭となりて。今石ゟ化したるゞ。追々生長して山ゟ成りと云ふ。所謂荒唐の言とれも〳〵ども。後方羊蹄ハ女神なまゝ。櫛ゟ由し有。其說ゟ似さる古傳ゝ。古事記日本紀ゟも見〳〵ゝまどもこと長それバ略ゝ。石の生長したりといふゝ。和漢ゟ例少ゝらゞ。宗谷字ノツシヤフのトウヘンナイの神岩唐太(カモイシユマ)クシユンコタンの岩神(シユマカモイ)等あり。又酉陽雜俎ゟ。有漁子下網舉之。有

「石如」拳。石遂長生已經」年重四十餘斤。下略　東蝦夷日記

〇飯鳥の事

夕張シコツ邊ハ。虎杖の實を虎杖米(クツタラアマ、)といひ。酸模(シユナバ)ヲシユナハアマヽと云て。飯ハ炊き喰ふなり。土人ハ如」此こと研窮して。雀の喰ふものを。何ハても糧ハ用ゆと。依て雀を飯鳥(アマ、チカブ)といへり。納紗布日誌

〇鋏錢高直の事

東蝦夷地御用地となりて。交易の會所等へ。御勘定御徒目付表火の番等。帳面を扣へ。木綿針煙管小刀等。是迄ヲ時の商人の仕來りし事ハて。草鞋の類ハ至るま

で十露盤を取て精密に書留る事なり。具足を持鎗を突せる役人のさる事にてもなく却て御威光も輕くなるに付永續の治りつさもいつゞと心痛むる事なり。然るに鋏錢通用もじまりて賣出ハ金壹分に一貫二百文買上ゝ一貫四百文なり。元來此錢の御仕入ゝ一貫六百文餘なり。ゝらバ金三分ゝ壹兩なる事にて日本國中錢の相場是ゝど高直なる事ハきつざるなり。南部津輕邊より雇れたる大工木挽ども路用に持行たる金一兩ゝ三分の代りとなる。一日銀四匁の賃に定めさる者ゝ三匁に當るなり。酒煙草類安直なる

やうなてもの積りてハ高直なりと。雇ども存の外渡世なもの成がさしと言るを。蝦夷人まで聞傳へて。交易御直捌ハ。高利をとるものゝ思ひたる樣ゝなり。御威光を薄くさる事ゝて。甚口惜きことなり。最上常矩厚岸亂申上

○群鹿の事

西ゝ沙流東ハ静内。北ビボク。南大洋を眺め。目ゝ障るものゝなし。遥向ふゝ三丁許りの間。一面赤くゝゆる故ゝ。彼ゝ何ぞと問ふ間ゝ。土人弓箭を握り走りて追行。其音ゝ今一面赤く。草の枯たるゝと見えし處。八方ゝ散亂さるハ。鹿の群集りしなり。其かぞ萬を以て算ふ

しと思ふる。土人の言ふ熊ハ好て陰森とる木立ふ住み。鹿ハ好て明き所ふ住と。是熊をおそるゝなるべし

東蝦夷日記

○鹿川を渡る事

西蝦夷地。石狩川の南の山ふ住める鹿ハ。秋八九月の頃其川を渡りて。東蝦夷地シコツといふ所の山ふ行。是ハ西地ハ雪深く食物なき故。東地へ移るなり。其時夷人共船ふ乗。石狩川の川端ふ。笹草など生茂りたる下ふ船をつけ。岸より川中へ横ふ。柱を三本ねどさしかけ。夫ふ葭簀を掛。其下ふ船を入。隠きて待居れバ。鹿

川へ飛込向ふへ渡る所を船乗出し川中にて追付打殺せなり。熊渡るときはかまをば右ショツへ渡りし鹿春はなきバ又川をまさりてもとの場所に歸るなり。夷諺俗話

○黒鹿の事

十勝神岳の邊に黒毛の鹿ありと。土人これを神の使もしめと云て。ろうれども皆獵しとる故。土人に是を詰るに。此山の神を此鹿を多く養ひたきて。土人の我々が食糧にあてさへ給ふなりと。自分勝手をいふもをかし。東蝦夷日誌

○海扇海上往來の事

西部中歌といふ所あて。ある年の冬の事なりしゞ。快晴の時。澳の方より。海上一面に漣のよる如く。數多の海扇ゞ蓋を帆として走り來り。最早岸三四丁とおもふ邊りにて海底に沉む。それより更して。爰に帆立貝漁を始めしに。日々大漁をなしゝるなり。脇乙名ムネトクの話に。余子供の時此所に帆立貝多く有しゞ。一日快晴の時。蓋を帆として。奥尻島の方へ行。其後一つの貝もなくなりしゞ。又此所に如此來るゝと云るに。其後奥尻島の貝ハなくなりしと聞て。西蝦夷日記

○厚岸蠣島の事

東部厚岸の土人酒六いふ凡蝦夷人の常食を魚獸なきとも嚴冬の水を氷りる山も雪積りて山海の獵なし得ざる時殆食料ゝ差支る事間々ありさやうなる時ハ厚岸ゝも蠣島ありて永世盡る事なれバ食料ゝ乏しからぜ心安く今日をたくきて已ゝ酒六ゞ祖父までも釧路の土人なりしゞ飢饉ゝあひて此厚岸へ來り住み餓死を免きたりとさてこの蠣島ハ實ゝ廣大ゝして厚岸入江のたゞ中ゝ簇々として築立さるゞ如し此蠣も其形他ゝ異ゝして殼の幅二寸許り。

長さ一尺一二寸ゟ至るゟ。肉を僅ゟ四寸ゟたらぶとうて火ゟ炙り食せるゟ。其味ひ最美なり。東蝦夷夜話

○山靈の和人を嫌ふと云事

釧路ゟ斜里へ行山中ゟ。ワツカオヒといふ所なり。此所を何様なる快晴ゟても。和人だゟ通さバ。雨降ゟしきけるを疑ひしゟ。余ハ三度通行して。三度とも雨ゟ逢しゞ奇と謂べきなり。土人の言ゟ。此所の山靈ハ。和人ゞ嫌ひなりと云傳ふるよし。通行舍の少し上ゟ。斜里川の源とて。水の湧所なるなり。久摺日誌

○まじなひの事

奥州半田より御雇銀山方大工頭取代六といふ者苦前字ハボロの金山見分の時濱邊にて蝮に足を喰付迯たり夫より痛み強くして股まで大に腫き歩行成がさくなやみしなり此時夷人ども云毒蛇にくれたる時もたのゞ仲間にてまじなひをなせに喰きてさる者を別家におき蓮を取て七ケ所にて焚き夫にてなたゝまず通るわど七ケ所にて度々なたゝめ全快まで別家にさし置よしかくされバきをめて快氣なさとおり蛇の事を夷言トツコカモイと云夷諺俗話

○鏃石の降といふ事

十勝字メモロフトにて召連たる土人鏃石三枚を持來り此石昨夜の白雨に降たりと云て我に與へる故夫ハ何處ぞと問ふに上なるチャシコツに在しと云まゝにそこに行て探しとるに又三枚と小き雷斧一枚を得たり其故を問ふに總て蝦夷にてハ大雨の降し後ハ此石のふるよし答へぬさて此石ゞ降といふ事ハ此地も内地も異らざる事なり其因をいもゞ元慶八年六月廿八日出羽國秋田城雷雨晦日雨石鏃廿三枚云々まゝ仁和元年六月廿一日出羽國秋田城中及飽海郡神社邊雨石鏃三代實録とふるにてもしらる此

品總て雨後得る所ハ雨ゐて土をのらひ流し叩出せしを降しもれと誤て傳へしなり東蝦夷日誌

○奇石の事

蝦夷地ゐハ珍奇なる小石なり空螺貝の石ゐ化したる多しまゝ蜆蛤帆立貝雲丹貝海老の石ゐなりさるなり或ゝ半ハ石と成り半ゝいまゝ木なるも有此外種々たゝしサンナイと云所の道傍ゐカムイシマといふ石なり黒き色ゐて横ゐ白く蛇の紋有石なり是ゐ足とふるれバ即死ゝといひて蝦夷人も大ゐ恐るゝなり夷諺俗話

○シユトハ故由なる事

此邊の夷家ハ。種々のシユトを掛さり。それゞ中ハもアカンシユトと。形ち算盤の粒を連串たさる如し。是第一嚴罪の者を打よしなり。何ぞも堅木ハて作れり。たとハ古きを猫頭刺を用ひたり。仍てヒイラキを夷言シユトといふよし。シユトハ作る木なれバ。たゝ號しなゞ。内地のヒラキの語も。ヒラ々々キの略ゝ。ヒラ々々と刺ぞ故ハ號け始めしゝ。抑此木を以て人打棒を作る事ハ。太古よりの故事と思ゑる。古事記ハ杜谷樹ハ尋鋒と云有。又加茂祭の時檢非違使の下部ゞ

持ち杜谷樹八尋鋒なり必シユトの事ハ古風の遺れるものと思ふなり納紗布日誌

○猿留新道の記

昔近藤守重ゴ猿留の新道を開きてより東部の往來も安らけく成たきバ其功業を記一板ゑ鐫て十勝の神社ゑ納めたり其文ゑ曰

蝦夷東北之徼自射麻兒至尾朗渉海岸之嶮若鞆筑子黽内巉巖絶壁登降趦趄蟹歩螺躍蟻附猿攀誤失一歩則齏粉必魚腹夷族死此嶮間亦有之江戸輶軒使近藤君一經此嶮有意新開道於山後恵登呂府安

歸之日風雨阻道路塞濡滯數日於是慨然發憤與通詞某及夷族商議出資散財自留邊志別溯水至神芟留按針南沿流而至鑢田奴月登降凡三里而近伐木架流爲橋碎石投谷爲梯行路初完跋渉無危人夷賴之是所以江戸餘沢波及夷族近藤君思人思夷陰德也余與其事記姓名掲刀勝神祠大日本寛政十年戊午十一朔庚申江戸輶軒使近藤君重藏從者下野源助録

通詞　豐吉
孫　七

夷族　六十八人

東蝦夷夜話

○蝦夷山川の事

蝦夷國々山川土石草木とも異なるゆゑバ。人物禽獸虫貝の類までもおとゞく其象たゞひゆりて。尤其名も別なり。そのゆらましを録して。記臆のかたりとは。所謂八種の傳ゆり。

一雲頭峻々寒地の山ゐして火氣ゆりがるゞ故ゐ温泉涌出る事有。金銀氣ゆる山形なり。

一柴頭峻々暖地の山ゐして。其中段より上ハ木なし。

れわくハ大山なり。

一柴体峻き。暖地の山は金銀氣ある山形あり。

一亂柴峻き。暖地の山は銅鉄氣ある山形あり。

一荷葉峻き。暖地は山あて。木草多し。草樹ある。

一披麻峻き。寒地の山あして。木せくなし。多くハ赤土なり。此形の山き。水せくなし。

一大斧劈き。岩山あて木れわし。水清ららあして麓ハ大河ある。

一小斧劈き。岩山あて木少し。水晶の氣ある事有。以上八種の山は見様心得て。何國あても試むべし。おと

川は五種の別あり。其大概所謂
砂川。此川上大山あして草木多し。岩山なるべし。
石川。此川上小山あして深山あらぶ。
泥川。是平原廣野いさつて暖地の川なり。
水色青。多く寒地の濕氣の地より出る。
水色白。多く暖地の濕氣なき地より出る。

蝦夷見聞誌

○蝦夷人の教化をもとらる事

北地危言は。松前主累世此土は恩威を敷。遠近の夷人
あカモイ殿と尊崇し。たまく拜謁の事ありてあ。恐れ

て姿を仰ぎ見るもおそれも無之程に服し居。且家士の采地になる夷人共。大に是を尊び尊卑禮を正し。家士も年々采地へ行。夷人ども來り宿しなどして。親しみも深き故。新に意を結びてをるまでもなく。何にてもかゆうくと教へさとをに隨て。早く會得をべし。是第一の安きに御坐候。扨また蝦夷の大欲々。口腹になるもおよて。其中に米酒煙草を專ら嗜み申候ゆゑに。一年中漁獵をる處ハ。各自家に用る外を。悉く米酒煙草或を諸道具衣服に交易いたし候。今諸夷衣服を赤夷より來るべけれども。米酒煙草を彼國にをしき處なれ

で。其事我ならかじめ申聞せ。松前よりの令よそむき。赤夷等相親み。又そ彼國は邪法を。尊信さるものならで。此後絶て米酒煙草の類を。送り遣さべからぬとならで。是のみよても蝦夷ども碎易いさし。堅く赤夷よ近寄申間敷候。是其大欲よ從て。いましめは行れ安きよ御坐候。蝦夷の愚直なる其風をなし。何よても已ゞ力よ及び難き事よ。感服仕るもはなり。日月は運動して晝夜なるゞ如き。元より蝦夷等ゞ思慮よなくさざる事なき。深く恐れ敬ひ。其外あやしきことなれで。カモイはもざなりとして慎めるよし。是よ教るよ

え。日月神を主として。幽冥中ゟ託して。本邦の開闢以來。有ゞたき事實を主と申聞せて。蝦夷も外人ならぬよし哉以て。導くべきのやせ如此。此三の施しやせき方御坐候間。我より手ぞやゟいたし候ゟ於、ゝ。蝦夷も國民ゟ替る事なし。

大日本の屬たる。小日本も出來可申ぞらりせ。難易利害損益ゆきらゝなる事ゟ。うゝ〳〵と打捨置候内。赤蝦夷より教化し來り。彼等ゞ本國城郭の壯麗なる事ゞも申聞せ。日本ハ物せ數ならぜなど申ふらし候ハゞ。自ら赤夷の強大ゟ驚怖し。兇角せる内赤夷ゟ慫慂せ

らきて。蝦夷等彼に先だつて。亂を起さむ事も計り知
るかさく候。蝦夷は性愚直なるものにして。黠智深く
殘忍なる事。女夷と雖も替る事なし。先年國後亂の節
も。專ら女夷共相手傳人を切ころぞく事。魚肉をさくが
如くに存。一黠のものびざるの情も見え侍。却て此亂
我ならで。其地へ參り候ものなどに。女夷途中にて行
逢候ても。さのらぬ體にもてなしおびき入。男夷とそ
のりて共に是を殺せの類。聞え申候。此等我以て見る
に。動亂等にそ。男女老少不殘一統して。相働可申候。如
此ものどもなりへに。赤夷の強大なる是が據處とな

り て。亂ぬ起し候ハヾ。米酒煙草ハ類。至極相嗜もハなゞら。是を以て命ぬはをぐハ食とそ致し來らぎ候間。左樣ハ節ハ送り不遣候共。兵粮責と申事ハそ至り申まじく。赤夷と食ぬ同くぎる上ハ。風雨雪中ハ露頭單衣ハて。山野ハ宿居候もの故。一且人ハ物と相成候上そいらむとも致し樣ハき事ハ存られ候。乍去今の内是ぬ教化致候ハヾ。力を勞せぎして。國民とひとしきとハハ。相成可申候。千嶋志料

蝦夷風俗彙纂後編巻八　終